

【釈文】

尚々、来年御上洛之御沙汰」御座候ハ、被仰聞可被下候。神尾刑部」被罷上候刻、来年ふと御」上洛可被成と被」思召候間、一位殿ニ」御下候事被相延、京都」ニて御上洛を被相待候様ニ」と御諚之由、神刑部殿被申候。」左様ニ候ハ、ふと御上洛も」可被成かと承度存候而」申上候事ニ候。以上

尊書拜見仕候。

一、太子様御誕生之為御祝」義、采女殿御のほせ被成候」御口上之趣承届候。并」拙者方へ諸白大樽ニ被下候。」忝奉存候。

一、御祝義御進物早々上」可申之处ニ、いまた何方よりも」上不申候間、今少相まち候而」可然之由、板周防殿被仰候間、」如何様とも御差図次第と」申、十六日ニ周防殿より使者」御添而進物上り申候。何方」よりあかり申も周防殿へ」たつねに参候へとも、何程と」さしつハ無御座候。大方」爰許立聞、拙者方より」もくろく書申而、板防州へ」談合仕候へハ一段可然之由ニ而、」拙者書候目録、板防州」自筆にて加筆、任其旨御」進物相極申候。自余之」なミよりハ少多御座候。」太子様へハ御太刀計ニ而」御馬代ハいつれよりもあかり」不申候。一位殿・太子様御ちの」人へハ上候而可然之由、周防殿」被仰候。其通ニ仕、御祝義上申候。」具之儀ハ采女殿より可被申」上候条、不能子細候。御進物」之目録も采女殿へ相渡」申候間、拙者よりハ進上不申候。

一、上方相替事無御座候。京」いなかともニ民百姓・町人・」奉公人までも米無之、迷惑」仕躰と相聞え申候。

一、来年 相国様可被成 御」上洛かの様にとり沙汰御座候。」左様之義御座候ハ、被仰聞可被下候。

一、大坂御城に御数寄屋出」来申、御路地已下も拙者に」よく申付候而置候様ニと」御意之旨、此頃永信州より」申来候。連々如申上候、京之」貴様御路地之石鉢并」前石御進上被成候而よく」御座候ハんと存候。前石も石鉢も」無御座候間、只今何方ニても相」尋すへ可申と存候。第一可」然か無御座候。大坂ハゆく／＼ハ御居城にも可被成所ニ御座候間、」此度御進上被成よく候ハんかと」存候。御数寄屋之がく・石」とうろ、右之分御進上被成」可然存候。連々左様に御」申被成候間、只今得御意候。」もし可然と思召候ハ、其元にて」信濃殿へ御相談可被成候。

一、相国様御気色之様子、」今程ハ御膳もあかり候様に」被仰聞、目出度存候。弥御機」嫌よく御座候御左右可被仰聞候。」上下ともニ是のミ氣遣」仕候。通仙院散々被相煩候」条、其元被罷下義も難」成存候。通仙之薬をあげ」被申様ニ仕度御事ニ候。

一、中山之かたつき之事、」度々被仰聞忝存候。扱々」結構成代物ニて御座候。初而」承おとろき存候。

一、拙者も此中散々相煩」申候而、于今不食仕、迷惑仕候。」されとも大坂御作事之」義に御用とも御座候而、大坂へ」罷下、昨日罷上候。其故御返」事一兩日相延申候。上方」御用之事少も／＼油断」不存候。随分身に及候御」奉公可仕と朝夕油断」不存候。

一、御息災ニ而切々御登城被」成之旨、目出度存候。弥」御養生被成候而可然存候。」尚追々可申上候。恐惶謹言

極月十七日

小堀遠江守

正（花押）

泉州様 貴報